



心を支える看護

〈愛媛県〉

おおの ともこ
大野 倫子 59歳

2016年初夏、肝機能の数値が悪化し抗がん剤治療ができなくなつた夫に、医師は「入院し病院でのおみとりになりますね」と告げた。夫は入院を拒否。医師の言葉から「今入院すれば二度と自宅には戻れない」と思ったのかもしれない。私もその日、夫を最後まで在宅で支えようと決心した。

しかし、まるで坂を転がり落ちるように悪化する夫の病状。看護の専門知識のない私にとって、病状の進んだ彼が自宅で、少しでも痛みや苦しみなく過ごすにはどうするべきか、入院した方が楽なのではないかと、大きな不安を抱えて過ごす日々だった。

そんな時、病院内に「がん相談支援

センター」という相談機関があることを知った私は電話をかけた。電話に出たのは、担当看護師のMさん。私の話を黙って聞き「つらかったですね、不安があればいつでも相談してください」と。張りつめていた私の心をMさんのその言葉がほぐし、電話口で私は涙を流していた。

そして通院日、腹水のため15キロも体重の増えた夫が、外来待合室で座って待つのはつらいだろうと、やはり支援センターの看護師Sさんががん化学療法室の空きベッドを用意し一緒に付き添ってくれ、高カロリー飲料や訪問看護について教えてくれた。そうしてお願いした訪問看護師Kさんは、深夜、呼吸が荒くなつた夫のためにすぐ駆け付けてくれた。

こうして心の支えを得た私たち2人は、手を握り合い、たくさん語り合い、時には抱き合い、夫が逝ってしまう前日まで、住み慣れたわが家で彼の希望通りの「日常」を過ごすことができました。

医療とは、看護とは何だろう。入院して、医師・看護師がそばにいるから安心なのではない。「心に寄り添ってくれる人がいる」。それが患者とその家族にとってどれだけ明るい光となるか……。今苦しみ悩んでいる患者と家族の1人でも多くの方が「心の支え」となる看護師と巡り会ってほしいと願います。